

続・ 珈琲の思い出五

18時のアラームが鳴ると同時に僕は席を立ち、課長に本日の業務の報告と、今日はこれで失礼することを告げると、鞆をひっさげて、脱兎のごとく会社を抜け出した。

どうか優子に会いたい、会って、この新聞記事がいかにすばらしかったか、どれだけ自分が嬉しかったか、ということ伝えたい。どうか、どうか間に合ってくれ。

僕は横断歩道が青に変わるのを待つのもどかしく、急ぎ足で駅前の本屋へ向かった。

ところが、入り口の自動ドアの前に立つてはじめて僕は、いざ、優子に会っても、何をどう話しているのか、何も考えていないことに気づいてぎよつとした。両膝に手を置いて、すっかり上がってしまった息を整えていると、「いらっしやいませ」という声がして、自動ドアが内側から自動的に開いた。

——そこには、僕のミューズが立っていた。

「佑樹君のお父さん、こんにちは！一体、どうなさったんですか??」

「あ、優子さん、ハアハア、ど、どうも。あのですね、ハアハア、け、今朝、優子さんが新聞に載っていらっしやるのを見て、び、びつくりしてですね。あの、お伝えしなくては、と思つて、ここまで来たんです。」

「まあ！わざわざありがとうございます！とつても嬉しいです。」そうして、満面の笑みをたたえる優子を見ると、僕はこのまま自分の心臓が止まってしまつてもいい、とさえ思つたのだつた。

鈴木優子